

多摩川の名脇役

強固でありながら芸術的な姿でたたずむ

3. 「河港水門」 (川崎市川崎区港町)

川崎駅に程近い場所にある河港水門。  
工業地帯にたたずむ芸術的な姿は、平成10(1998)年9月に国の有形文化財にも指定されています。この水門をめぐる"幻の大運河計画"とは・・・



(左から時計回りに)

多摩川からみた河港水門／「河港水門 川崎市」／周辺の工場／多摩川から見た河港内／水門上部のモチーフ (写真はすべてH16.4撮影)

大正の終わりから昭和の始めにかけて、多摩川の下流付近では「多摩川改修工事（大正7:1918年～昭和8:1933年）」による築堤工事が進行中でした。

この辺りは、多摩川を利用して原料等を運ぶ工場が建ち並び、荷揚げ用の河岸場がひしめき合っていました。

改修工事の一環として、各企業ごとの河岸場を一つにまとめ、舟運を良くするために、大きな河港を造ることになりました。

しかし、河港によって堤防が途切れてしまうため、状況に応じて川と河港を遮断することができる強固な水門が必要となりました。

大正15(1926)年11月、河港水門の建設がはじまります。

水門は、当時多摩川改修事務所長であった金森氏<sup>\*1</sup>考案の"金森式鉄筋レンガ"や、当時新しい特許技術であった"まさかり杭"を使い建設されました。

水門の上部には川崎の名産であった桃・梨・葡萄をアレンジしたモチーフの彫刻が、梁にはエジプト様式の舟が描かれていたそうです。（絵は現在は消えてしまいました。）

多摩川の河口付近で、元禄時代(1688～1704年)からはじまったとも言われている梨栽培は、明治に入り"長十郎梨"が開発されると最盛期を迎えます。

同じく明治時代には、日本で初めて外国産の桃が栽培されはじめました。またその頃、葡萄も広く栽培されていました。



しかし、このように強固で芸術的な水門の建設にあたっては多大な費用（総工費54万円いわれています）が必要になります。

そこで、金森氏は隣接する鈴木商店（現：味の素）へ寄付を依頼したそうです。

これを受けた鈴木社長は、築堤工事によって最も支障を受ける鈴木商店に、専用河港を築造してもらうことを条件に、27,333円の寄付に応じたと言われています。

大正の終わりから～昭和の始めにかけての平均月収は、総理大臣約1000円、小学校教員約70円、工場勤務約50円ほどだったようです。

生活費においては、東京都渋谷区の3DKの1戸建1ヶ月当たりの家賃が約30円、カレーライス1皿が約12銭程度でした。

この例からも水門建設にかかった費用はもちろん、鈴木商店が寄付した金額は多大なものだったことがわかります。



そして1年4ヶ月後の昭和3(1928)年3月、河港水門は完成します。

ちょうどこの頃、川崎市による運河計画が浮上していました。  
この計画は1号から3号まであり、この水門から浅野町地先海岸まで抜ける運河が1号に該当するものと言われています。  
総工費600万円という壮大な計画は、「水の都川崎」と新聞でも華やかに取り上げられました。



ところが、第二次世界大戦の勃発により軍需産業が活発になり、社会情勢や国益に合わなくなった運河計画は、水門から約220mほど開削された所で中断されてしまいます。

こうして運河計画は幻と化し、周辺の工場地帯も時代とともに変化しましたが、大正から昭和への移り変わりに建てられた河港水門は、当時のままの姿で今も働き続けています。

---

\*1金森氏については、2.六郷水門をごらんください。

(1) 河港水門は川崎市土木局が管理しています。